

近世播磨の街道と一里塚整備

―慶長・正保の「播磨国絵図」の再検討―

大 国 正 美

はじめに

近世の播磨を貫く街道は山陽道が最も重要で、次いで限定的ながら参勤交代に利用された美作・因幡道がそれに次ぐ地位を占めた。近世山陽道について、『兵庫県史』第四巻は、慶長十六年（一六一一）、十七年ごろの作成とされる「慶長播磨国絵図」^①をもとに、王子町（明石市）・加子（加古川市）・五ちやく^{（御着）}・姫路（以上姫路市）・片島^{（有年）}（たつの市）・西うね^{（有年）}（赤穂市）の六カ所を宿場としてあげ、ルートを説明している。

美作道については、姫路・飾西村（以上姫路市）・鷺崎村・千本村（以上たつの市）・細月村^{（三日月）}・佐用町（以上佐用町）から津山（以上岡山県）に至

る。因幡道は、途中までは美作道と同じで、細月村から平福村（佐用町）・智頭を経て鳥取（以上鳥取県）に至った。山陽道と美作道については兵庫県教育委員会によつて『歴史の道調査』^②が刊行され、近世については八木哲浩氏が論じている。

このほかにも脇往還とよばれた街道は多くあった。八木氏は『歴史の道調査』や『姫路市史』^③の中で「慶長播磨国絵図」の一里塚を検討し、山陽道以外に姫路を起点にした脇往還について、次の七つを挙げている。

飾西村 鷺崎宿「美作道

一本松村 志方町 国包村 三木町 淡河町

小川村 法花坂本 半町（繁昌村） 下三草

村 馬瀬村 清水寺

太尾村 山下村 北条ノ市場 明楽寺村

太尾村 辻川村 屋形村 上吉殿村 真弓村
青山村 前ノ庄村

飾西村 刀出村

そのうえで八木氏は「明石とか三木・龍野・赤穂といったところから出る道には一里塚の記載はいつさいない」「姫路から遠いところでは、ほとんど一里塚の標記が見られない」と述べている。江戸幕府の五街道の一里塚は『徳川実紀』⁴によれば慶長九年二月、徳川秀忠の命として東海道・中山道・東山道に設置を命じたのが始まりという。「其外公料は代官。私領は領主沙汰し。五月に至り成功す」とあるが、八木氏は慶長年間の播磨の一里塚について「他国へとつながる一里塚の制度ではなく、当時播磨一國を領有した池田輝政が作らせた領内の制度としての一里塚」と幕府の方針と異なっていると指摘する。

では播磨ではどのように一里塚が整備されたのか。寛永年間（一六二四—四四）に参勤交代が定着、山陽道や美作道でも宿駅の指定が進んだ⁵。一里塚の整備もこの時期に加速したことが想定される。正保元年（一六四四）に作成を命じられた

「正保播磨国絵図」は、寛永期の整備の到達点を表すものである。一里塚が設置された脇往還が重視されたルートと思われるので、新設された一里塚を明らかにすることは、播磨での街道整備の方針や重視された脇往還を示すことになる⁶と考える。しかし一里塚の設置状況について、「慶長播磨国絵図」と「正保播磨国絵図」の比較検討がされず、違いについて注意が払われてこなかった。

結論を先回りしていえば、「慶長播磨国絵図」で八木氏が拾い上げた一里塚には漏れがあり、但馬へ通じる生野道などには「慶長播磨国絵図」にも一里塚が描かれている。さらに姫路から遠い宍粟郡北部の千草町附近、逆に姫路に近い書写山附近、室津への脇往還などにも「慶長播磨国絵図」には一里塚が描かれているが、「正保播磨国絵図」には一里塚のない脇往還になっている。姫路からの距離に関係なく、「正保播磨国絵図」で消えた「幻の一里塚」とは何なのか。「脇往還の降格」とも言え「起点が変わった」では説明が付かない。加えて「慶長播磨国絵図」と「正保播磨国絵図」で位置が食い違っている一里塚と、その近辺で設

置場所がびったり一致している一里塚が混在している。この理由も八木氏の説だけでは、説明できないように思う。

このため小稿ではまず「正保播磨国絵図」の一里塚を確認して山陽道と主要な脇往還は何かを明らかにする。続いて「慶長播磨国絵図」との食い違いについて検討する。これを通じて「慶長播磨国絵図」の性格も再検討したいと考えている。

一、「正保播磨国絵図」に描かれた脇往還

(1) 「正保播磨国絵図」の検討

さて「正保国絵図」は明暦三年（一六五七）の大火で原本が焼失し、模写されたものが複数残っている。ここで検討対象にするのは、国立公文書館内閣文庫蔵の松平乗命旧蔵「播磨国図」、同中川忠英旧蔵「播磨国絵図」に加え、京都府立京都市・歴史彩館（旧京都府立総合資料館）蔵の「播磨国絵図」、明石市立文化博物館が古書店から購入した「正保播磨国絵図」の写本とされる「播磨国絵図」の四点である。またこの明石市本に酷似し

ているシーボルト収集のライデン大学所蔵「播磨国絵図」も参照した。

ほかに「正保国絵図」の控えとされるものに、たつの市の新宮八幡神社蔵の「正保播磨国絵図」があるが、新宮八幡神社本には一里塚は描かれておらず検討対象から外した。新宮八幡神社本はそもそも小ぶりで、本来郡別に色分けすべき村が領主別に色分けされ、村高の記載もないなど、国絵図の描写基準からは大きく逸脱している。県指定文化財なので名称変更は不可能だが「正保播磨国絵図」と呼称すると誤解を与えかねないとさえ考えている。

絵図の模写本の場合、原図は何かという検討と、原図が何であつてもいつの時点で模写が行われ、その際の改変や写し漏れがないのか、という検討の必要があり、当時の景観の復元をする場合、困難な問題が横たわっている。「正保播磨絵図」はいずれも後世の模写で、厳密に言えば描かれた一里塚の情報がただちに正保段階の情報と断定するわけにはいかない。どの情報をどの程度正確に写されているのかを見極める必要がある。そこで

一里塚の検討に入る前に、それぞれの絵図の精粗について検討しておきたい。

(2) 模写本の領主名と石高記載について

本来の国絵図には、畠紙（絵図の余白部分）に郡ごとの石高の集計と村数や領主ごとの所領高、図中の郡名にも郡の石高と村数、城郭や陣屋には領主名が記載されている。畠紙に限れば郡高・領主名の記載がそろっているのは京都府立本と松平乗命本で、「正保郷帳」の領主名と一致している。ただし図中の記載は少しずつ漏れや違いがあり、松平乗命本は、畠紙と図中で領主名が食い違い、模写本の異同については別稿を用意する。

一方中川忠英本の畠紙には郡高の記載のみがあつて、領主ごとの所領の集計がない。また個々の村には石高や領主を示す記載もない。川村博忠氏は松平乗命本より中川忠英本の方を「全般に模写はよいような印象を受ける」としているが、播磨に限れば逆で、松平乗命本の模写の方が詳しい。明石市本やライデン大学本の畠紙には、郡高や領主ごとの所領高の記載はない。

中川忠英本は明暦三年（一六五七）の大火で

「正保国絵図」が焼失した後、残っていた控えを模写して再提出した絵図が含まれている可能性が指摘されている^①。再提出に当たっては再調製するのではなく、石高など記載内容は「正保国絵図」のままだが、周防・長門のように領主が変わった場合、領主名を現状に合わせて書き換え再提出された。

中川忠英本「播磨国絵図」は再提出図系なのか。畠紙には領主名がないが、図中の一部の城郭・陣屋部分に領主名の記載があり、赤穂城は浅野内匠頭、新宮陣屋は池田内蔵助、林田藩は建部内匠頭と記載されている。この三人がそろうのは浅野長直が赤穂に封じられた正保二年（一六四五）から池田内蔵助が死去した慶安四年（一六四九）までに絞られる。周防・長門と違い、播磨の場合、中川忠英本の領主名は寛文段階のものではない。

また明石本「播磨国絵図」について加納亜由子氏は、明石市西部から神戸市西区にまたがる印南野台地の新田開発の状況をもとに「正保播磨国絵図」の写しとした。ただ図中の領主名には加納氏が指摘する通り、新宮藩主は慶安四年（一六五一）

に死去した池田内蔵助なのに、明石藩主は万治二年（一六五九）に入部した松平日向守で慶安以降の記載になっている。同時に存在しない領主名になっていて、時期を検討する困難が伴¹⁵つ。

（3）京都府立本の特徴

京都府立本については、国絵図研究会『国絵図の世界¹⁶』では「正保播磨国絵図」とは評価されておらず、大きさの記載もない。これを受けて藤田裕嗣氏は「正保に傾くが、寛文図である可能性も捨てきれない」と慎重である¹⁷。一方工藤茂樹氏は京都府立本について図の様式について松平乗命本と比較して「正保図の様式にすっかり即して描かれている」と述べている¹⁸。

京都府立本に關し、これまで触れられていない点を付言すれば、まず大きさは、縦に四分割され最長部分は三七〇^分、横は四枚合わせると三六五^分を測り、松平乗命本（三九〇×三五五^分）や中川忠英本（三九六×二七〇^分）と同等かやや大きい。また城郭・陣屋の領主名は空白はあるが「正保郷帳」と矛盾しない。また松平乗命本は「千本」を「与本」、「芝田」を「吉田」、「段之上」を「段

山」、「馬立」を「馬籠」、「千草」を「戦草」などと誤記しているが、京都府立本は正確である。このため原本に近い絵図からの模写本と評価した¹⁶。

京都府立本が寛文年間の再提出図かどうかは、簡単に結論が出ないが、寛文期以前に交代した領主、例えば明石藩主は転封した大久保加賀守、新宮藩主は死去した池田内蔵助とした点をどう考えるか。再提出では領主名は正保期の領主名とするのか、再提出当時の領主名にするのか、ほかの事例をもとに引き続き検討が必要だろう¹⁷。

絵図そのものの模写内容については、市川の流路が天和三年（一六八三）の水害後の流路の可能性があると大槻守氏の指摘もある¹⁸。ただ松平乗命本や中川忠英本でも市川については同じ描写であることを考えると、天和以前にも流路の変更があつた可能性があり、天和三年以降の景観と断定はできないと考える。また府立京都学・歴史館の同じコレクションに含まれる他の国絵図との比較検討なども必要である¹⁸。

以上、さまざまな課題があるものの、「正保国絵図」の様式に沿い、四点の中では地名も最も正

確な京都府立本をベースに、松平乗命本・中川忠英本・明石市本とも比較しながら、主要な脇往還と一里塚を検討したい。

(4) 東播磨に偏る主要な脇往還

四点の「正保播磨国絵図」に描かれた「最大公約数」の一里塚を、扉口絵、に示し、また主要な地名を記載した。一里塚の位置は後世の国絵図と一致している。四点の「正保播磨国絵図」を検討すると、中川忠英本は漏れがなく、京都府立本二力所、松平乗命本五力所、明石市本一・二力所漏れがある。ただ重複して漏れている箇所はなく、扉口絵、との違いは、模写の漏れと考えるのが妥当だろう。一方明石市本のみ描かれている一里塚が計三力所あるが、後世の国絵図にも記載がなく、誤写と思われる除外した。

個々の一里塚の位置は次節で述べるとして、ここでは一里塚のある街道は、ほかの脇往還より重視されたと考え、八木氏の言及のない点を中心に指摘しておく。

山陽道は八木氏の指摘通りだが、陸村(相生市)付近で分岐して赤穂に向かう赤穂道が山陽道と匹

敵する太さで描かれ、一里塚も描かれている。

美作道・因幡道のルートについても八木氏の指摘通りだが、美作道と因幡道が分岐するのは細月村(佐用町)を過ぎ、林崎村(佐用町)を越えてからである。「慶長播磨国絵図」では一里塚があるのは三力所だけだが、「正保播磨国絵図」になると、船渡村の西、平野村、千本村の西、鍛冶屋村(以上たつの市)の西、細月村の西、林崎村の西にもあり、ここで因幡道と分岐する。美作道は、佐用町の東、早瀬村、大畠村(以上佐用町)の西に一里塚が描かれ、ここから美作国土居村へ出た。因幡道は林崎村を過ぎて、口金近村、平福村の東、豊福村と大畠村の間(いずれも佐用町)に一里塚が描かれ、美作国中山村から因幡に至る。

一里塚のある摂津への脇往還は、八木氏が掲げたの姫路志方町(加古川市)高木村(三木市)中町村(神戸市)がある。美囊郡や有馬を経て京都に向かう中世以来の重要な淡河道(有馬道)で、美作道並みの太さで描かれている。一方明石郡内も明石を起点にした脇往還に一里塚が描かれているが、道の描写は細く、摂津と直接つな

がらず美囊郡と結ばれている。これは明石藩が美囊郡を領有したことも絡んでいるだろう。

道の太さでは淡河道に劣るが高木村を過ぎてから分岐し金屋村、古市村、西浦村（以上三木市）を経て相野村（三田市）へ通じる脇往還がある。

八木氏が掲げた（繁田）の法花坂本 半町（加西市）
下三草村 馬瀬村 清水寺（以上加東市）は、

書写山円教寺から法華山一乗寺、社村、御嶽山清水寺を廻り丹波に抜ける西国三十三所巡礼道である。（10）社村で分岐し念仏村（加東市）を経て古市村に行き、前述の高木村から撰津国相野村に抜ける脇往還にも一里塚がある。

法華山一乗寺、繁昌村を過ぎて加古川沿いを北上する両岸には最も多く一里塚が設けられている。上滝野村（加東市）から西脇村、船町新田（以上西脇市）を経て丹波に向かう加古川右岸と、堀村、福地町、小苗村（以上西脇市）を経て丹波に向かう加古川左岸の両岸に一里塚がある。さらに加古川左岸では堀村付近で分岐し上比延村（西脇市）に向かう脇往還にも一里塚がある。それだけ加古川の交通網としての重要度が窺える。

姫路から大尾村（大尾）（姫路市）、北条ノ市場（加西市） 明楽寺村（西脇市）のルートは、仕出原新田、中村町、豊部村、山寄上村（以上多可町）を経て丹波に抜ける杉原谷道に繋がっている。なお明楽寺村 仕出原新田は慶長期はつながっておらず、この時期に整備された。この点については次節で改めて述べる。

の北条ノ市場へ向かう脇往還から大尾村（大尾）で分岐して北上するの辻川村（福崎町） 屋形村（市川町） 上吉殿村（上吉殿）（神河町） 真弓村（朝来市）は、生野道とも但馬街道ともいわれ、播磨から但馬への最も重要な脇往還であった。播磨と但馬を結ぶ脇往還で一里塚があるのはこのルートのみである。宍粟郡には北部の戸倉村と道谷村（以上宍粟市）附近に一里塚が見られるが、因幡と但馬を結ぶもので、姫路など播磨の所々と結ぶ脇往還ではなかった。

以上、全体を概観すれば「正保播磨国絵図」に描かれた一里塚は南部と東部に偏っていた。播磨と撰津・丹波とを結ぶ脇往還に多くの一里塚があるのに対し、西播磨の北部には極めて少なく、参

勤交代や旅人の需要に応じた配置になっている。また室津から正条に繋がる室津道は赤穂道に比べ細く描かれている。八木哲浩氏によれば毛利藩の参勤交代は、一七世紀末の貞享〜元禄期は藩領から船に乗り、室津 兵庫津に寄港して大坂に直接航行、一般的にも山陽道はあまり利用されなかった。寛保三年（一七四三）以降に全コースを陸路で伏見に向かうという²⁰。室津に上陸し、陸路で東上する行程は参勤交代も庶民の旅行も一七世紀はまれだったことを反映している。

以上四点の「正保播磨国絵図」で確定した一里塚は、「元禄播磨国絵図」や「天保播磨国絵図」²¹と違いがなく、重視された脇往還も同じである。

二、「慶長播磨国絵図」の街道と一里塚

八木哲浩氏が述べているように「慶長播磨国絵図」に描かれている一里塚は近世に設置されたものの一部にすぎず、慶長段階では街道整備の途中段階である。「正保播磨国絵図」で主要な脇往還を確認したことに続き、個々の一里塚について、

「慶長播磨国絵図」と比較を試みたい。ただし「慶長播磨国絵図」は現在閲覧することができず、出版された図版で調査する必要がある、最終確認ができない点もあることをあらかじめ断っておく。以下部分図を掲げ一里塚を矢印で示した。

（一）山陽道の一里塚

「正保播磨国絵図」には播磨の山陽道には一里塚は一九カ所描かれている。検討対象にした四点の模写本もライデン大学本も食い違いがない。これに対し、「慶長播磨国絵図」はどうか。結論を言えば、漏れがあったり微妙に位置が異なったりしているところがある。

例えば「慶長播磨国絵図」では、東垂水村の西、西垂水村との間にあるが（図1）、「正保播磨国絵図」では、東垂水村の東の垂水川（福田川）左岸に一里塚がある（図2）。またその西の山田村（以上神戸市） 大蔵谷村、王子村 和坂村（以上明石市）の一里塚がいずれも、「慶長播磨国絵図」の方がわずかに東寄りになっている。この三カ所の一里塚は、毛利藩の絵師有馬喜惣太が描いた「行程記」²²には、垂水川の東、山田村と大蔵谷

村とのほぼ中間、王子村より和坂村の近くに描かれており、「正保播磨国絵図」の位置と一致する。その西の清水村では「正保播磨国絵図」では清水村の西で、清水新田との間に描かれているが、「慶長播磨国絵図」では清水村の東に描かれ、ここでも微妙な違いがある。ただ「慶長播磨国絵図」

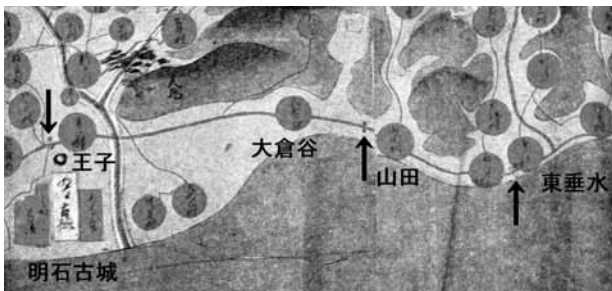


図1 東垂水—和坂
(慶長播磨国絵図、天理大学附属天理図書館蔵)



図2 東垂水—和坂
(正保播磨国絵図、京都府立京都市・歴彩館蔵)

は清水新田を清水町、清水村を清水新町と位置を間違つて記載していて、それが影響した可能性もある。一方その前後の福田村(以上明石市)、^山上村(加古川市)付近、さらに西の姫路までの一里塚の位置は「正保播磨国絵図」と一致している。次に姫路から西を見てみよう。「正保播磨国絵

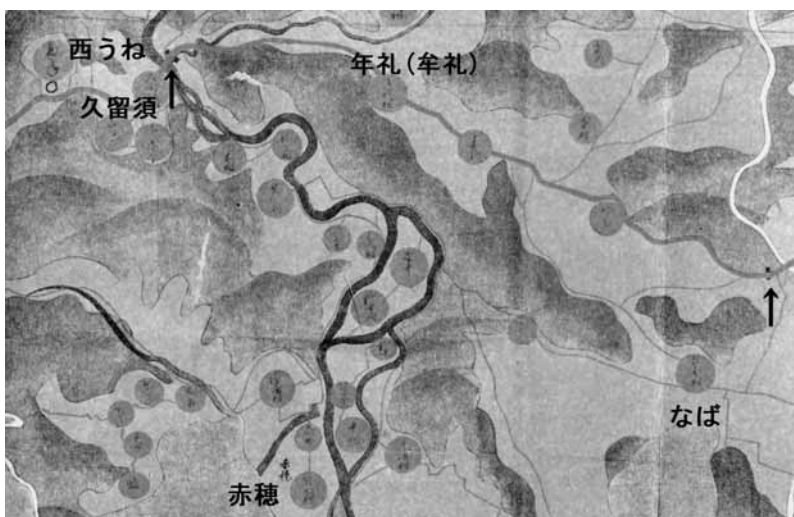


図3 姫路—山田、飾西 (正保播磨国絵図)



図4 姫路—上太田（慶長播磨国絵図）

図5 赤穂郡の山陽道（慶長播磨国絵図）



図」では下手野村、揖東郡に入ると山田村の西に一里塚を描いているが（図3）、「慶長播磨国絵図」では、いずれもその西の青山村（以上姫路市）、上太田村（太子町）附近になっている（図4）。その西となると「慶長播磨国絵図」の一里塚は急に疎になり、揖西郡にはなく、赤穂郡に入ると陸村（相生市）から赤穂城に向かう分岐点と、千種川の久留須（栗栖）の対岸のみだが（図5）、一里塚の位置自体は「正保播磨国

絵図」と一致している。

「慶長播磨国絵図」の一里塚の位置が「正保播磨国絵図」と比べ、位置が微妙に異なったり、疎なったりしていることをどう考えるか。摂津国境から姫路までの東播磨は「正保播磨国絵図」と数は一致するが、姫路 備前国境までの西播磨は疎になっていること、慶長期という段階を考えれば、記入漏れではなく、重要だった東播磨で一里塚が優先的に整備された。西播磨については重要な拠点から設置しようとしたのではないか。

慶長段階では山陽道といえども西播磨は整備が遅れていたのだろう。山陽道から赤穂への脇往還も「慶長播磨国絵図」には一里塚がないが「正保播磨国絵図」には四力所描かれていることもこのことを裏付ける。

位置が異なっている点に関しては、結論を急がず、ほかの脇往還への一里塚を検討した後に考えたい。

(2) 美作道・因幡道の一里塚

美作道は前掲注(2)所収の八木哲浩氏の「近世の美作道」によると、「慶長播磨国絵図」では

姫路から辻井村 田寺村 御立村を通っていたが、

「正保播磨国絵図」では姫路から今宿村 下手野村に進み、小塩川左岸で山陽道と分岐して北上し飾西村に通じるルートに変わった。「慶長播磨国絵図」では小塩川(夢前山)の東、石蔵村(石倉)の過ぎたところ、横落村(横内)の西の三力所に一里塚の印が付けられているが、「正保播磨国絵図」やライデン大学本などには、飾西村(以上姫路市)の西、野部村(たつの市)にあり食い違ふ。ルートが変わり、距離も変わったためだろうか。

それより以遠は「慶長播磨国絵図」には一里塚の標記がなく「正保播磨国絵図」の表記は前述した通りである。

(3) 淡河道(有馬道)の一里塚

「慶長播磨国絵図」では一本松村(姫路市)には一里塚は描かれておらず、加古郡に入った人家のない山中と、志方町の東に描かれている。山門(山角)村に一つだけある黒丸も距離からして一里塚だろう(図6)。しかし「正保播磨国絵図」では、志方村よりかなり西の原村の西に描かれ、投松村の東、薬栗村と都染村(以上加古川市)の間に



図6 原—山門（慶長播磨国絵図）



図7 原—都染（正保播磨国絵図）



図8 大戸田—淡河（慶長播磨国絵図）

一里塚が描かれ、位置がかなり異なっている（図7）。

美囊郡に入ると「正保播磨国絵図」は右野村、中嶋村、中村、大戸田村（以上三木市）と下村の間、中村町、中山村、野瀬村（以上神戸市）と摂津との境界に描かれている。これに対し「慶長播磨国絵図」（図8）では、

大戸田村に一カ所あるだけである。しかも大戸田村の直近に描かれており、位置が変更になった可能性はある。このように淡河道の場合は「慶長播磨国絵図」と「正保播磨国絵図」との食い違いが大きい。この点についても最後に考察を加えたい。

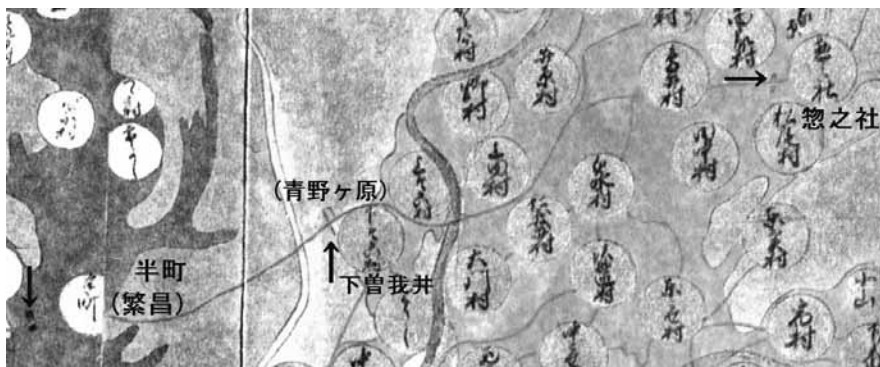


図9 半町—惣之社（慶長播磨国絵図）



図10 繁昌—社（正保播磨国絵図）

(4) 西国巡礼道の一里塚
「慶長播磨国絵図」では庄村のすぐ西、法花、西笠原村、半町（惣之社）の西、下そかい（上曾我井）の西、惣之社（図9）、上三草村、馬瀬村にそれぞれ一里塚を描いている。これに対し「正保播磨国絵図」では、姫路を出て小川村と庄村の間、山崎村（以上姫路市）、法花、東笠原村、繁昌村（以上加西市）の東、野村の手前（のちの青野ヶ原新田）、社村（図10）、上三原村、馬瀬村（以上加東市）の東、上鴨河村の東に一里塚が描かれている。両者を比較すると法花や上三草村などで位置が一致する一方で、繁昌村や社村では集落の東と西で位置が逆である。

(5) 北条市場道の一里塚
「慶長播磨国絵図」では、明

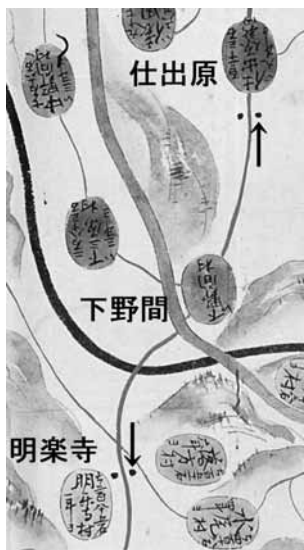


図12 明楽寺—仕出原新田
(正保播磨国絵図)



図11 明楽寺と新田
(慶長播磨国絵図)

楽寺村を過ぎて多可郡に入ってから道が細く描かれ、下野間村から山間部の大屋村までの集落に繋がるだけで、道は行き止まりになっている(図11)。これに対し「正保播磨国絵図」では、野里を出てから白国村、牧野村(以上姫路市)、山下村、市場村、打水村(越水)(以上加西市)、明楽寺村



図13 貝野—上吉殿
(正保播磨国絵図)

(6) 生野道の一里塚
生野道は八木氏が一里塚のある脇往還として取り上げていないが、「正保播磨国絵図」では太尾村(姫路市)の北、西光寺村(福崎町)、田中村の北、屋形村(以上市川町)、新殿村、上吉殿村(吉野)の北(図13)、猪篠村(以上神河町)の北、川尻村と真弓村(以上朝来市)の間に一里塚を描く。

(西脇市)、仕出原新田、中村町、荒田町(安芸田町)、豊部村、三谷村の東、山寄上村(以上多可町)にそれぞれ一里塚が描かれている。明楽寺村から下野間を通って仕出原新田が繋がっている(図12)。慶長時代になかった姫路 加西郡と杉原谷を結ぶ脇往還が、整備されたのだろう。

これに対し「慶長播磨国絵図」には、西光寺村、田中村の南、かいノ口村(貝野)(神河町)、上吉殿村の南(図14)、真弓町のすぐ南に描かれている。慶長期に比べ、「正保播磨国絵図」では上吉殿村の南から北へ、貝野口村から新殿村へ、田中村の南から北へ、場所が大きく変化している。

三、姫路からの幻の一里塚

八木哲浩氏は「慶長播磨国絵図」には、さらに青山村 前ノ庄村、飾西村 刀出村(いづれも姫路市)に一里塚が描かれ、脇往還だとする。



図14 田中—上吉殿
(慶長播磨国絵図)



図15 御立—書写山。東を北上すれば雪彦山
西を北上すれば山崎(慶長播磨国絵図)

このうち 青山村―前ノ庄村を脇往還とする見解には疑問がある。青山村の山陽道には前述のように一里塚が描かれているが、北上して前ノ庄村につながる街道が描かれていないからである。前ノ庄村から南下すると書写山の東、玉田村を経て御立村を経由し美作道に合流(図15)、姫路城下に至る。一方前ノ庄村から北上すると雪彦山にたどり着き行き止まりである。これは姫路からの雪彦山道とよぶべき信仰の道で、「正保播磨国絵図」にはいずれも一里塚が描かれていない。

また 飾西村 刀出村の脇往還については、確かに「慶長播磨国絵図」には飾西村 六角村 刀出村に脇往還があり、六角村と刀出村の間に一里塚が描かれている。しかしその一方、御立村と書写山の西坂本村との間にも一里塚が描かれ、西坂本村から六角村に繋がる脇往還がある(図15)。刀出村から先について八木氏は一里塚がないとしているが、刀出村の北に行くと塚本村、さらに足を延ばせば安志町(以上姫路市)を経て須賀町(宍粟市)の手前にも一里塚の標記がある。ここから山崎村を越えて、桂根村、塩之丁、下河野村

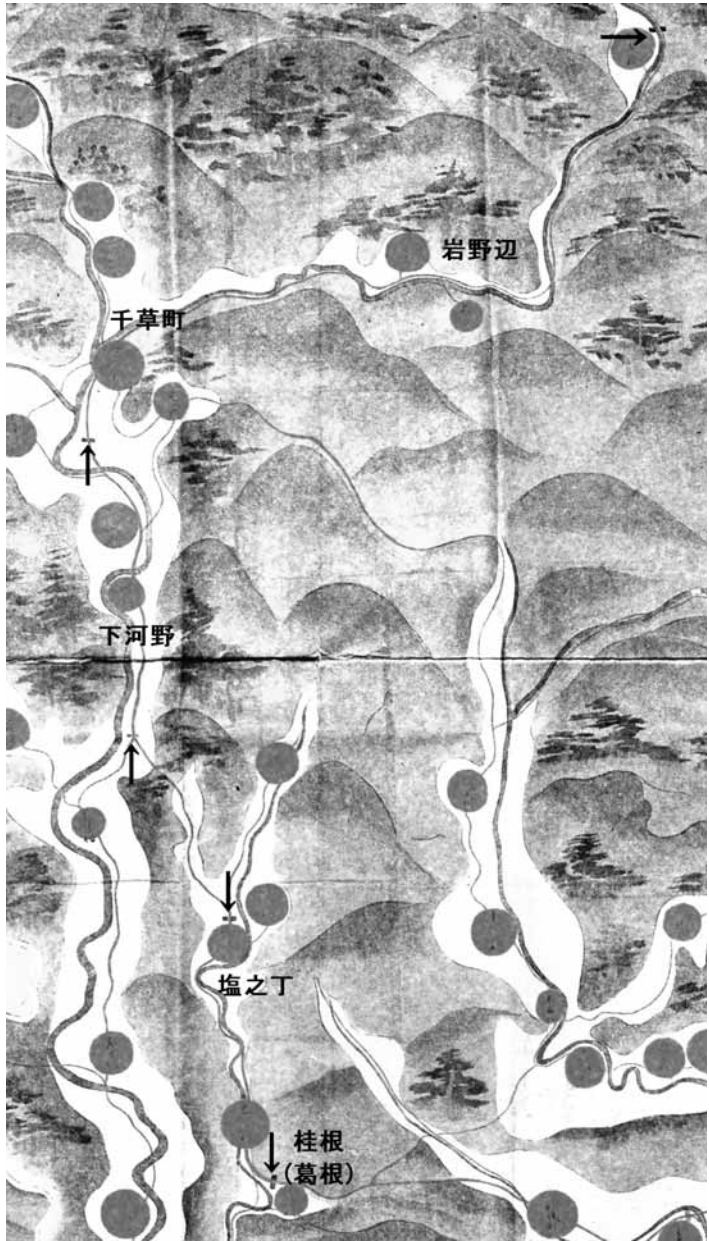
と塩之丁との間、千草町の南、さらに岩野辺村(以上宍粟市)から岩野辺川を遡った奥地にも一里塚が描写されている(図16)。これはいうまでもなく、書写山への信仰の道と、千草町とその奥に繋がる鉄の道だろう。

次に南部に目をやると、姫路 町之坪村に続く付城村の北、さらに山崎村 乗縄村(別見) くまみ村を越えやまと村(以上姫路市)にも一里塚が描かれている(前掲図4)。町之坪村は室津道の重要拠点で、近世には室津道往還役を命じられ、御用物継場として請取村継ぎを行っている。いうまでもなく播磨最大の港、室津と結ぶ物流の道である。

ところがこれらの信仰の道、鉄の道、物流の道は、松平乗命本、中川忠英本、京都府立本、明石市本の「正保播磨国絵図」模写本、そしてライデン大学本、さらには元禄・天保の「播磨国絵図」にも一切一里塚の記載がない。これは単なる模写の作業漏れではない。正保以降一里塚はなかったと考えるべきであろう。

では「慶長播磨国絵図」に描かれたこれらの一里塚の標記は何か。筆者は、設置済みの一里塚も

あつただろうが、未だ計画段階で設置されていないものも含めた、いわば一里塚の設置計画図の性格を持っていたと考える。すなわち設置場所が構想されたが、未だ設置する前の一里塚も記載した



ため、「正保播磨国絵図」以降の国絵図に描かれていない一里塚が登場したのではないか。また実際測量したところ設置位置が変更され、「正保播磨国絵図」の位置に落ち着いたものもあつたのではな

図16 桂根—千草（慶長播磨国絵図）
千草から東北方面、岩野辺の奥地にも一里塚

かろうか。

こう考えると西播磨の山陽道で一里塚の間隔が広い理由が納得できる。また「正保播磨国絵図」と設置場所が一致する一里塚もあれば、その近隣の一里塚の位置がかなり食い違ふ例が少なくないことも、無理なく理解できる。

そもそも「慶長播磨国絵図」には未完成で終わった姫路から南部の飾磨港を結ぶ三左衛門堀が完成したように描かれている。三左衛門堀に関して「慶長播磨国絵図」はいわば計画図である。一里塚についても同様だったと思われる。

「慶長播磨国絵図」が作られた直後、慶長十八年（一六一三）に池田輝政が病死すると播磨一国を領有していた姫路藩の分割が始まり、宍粟・佐用・赤穂三郡がまず姫路藩から分割された。元和三年（一六一七）には姫路藩主池田光政は、幼少を理由に因幡・伯耆に転封され、姫路には本多忠政が入部、譜代大名が播磨に続々配置された。

池田輝政の時代、三左衛門堀に加え、姫路を中心とした陸路の交通体系の整備のため、一里塚が構想され一部は設置されたが、播磨一国を支配す

る姫路藩の分割によって、輝政の描いた播磨の交通網の整備計画は中止されたのである。この結果室津道、千草道、雪彦山道、書写山道など、一里塚の設置そのものが沙汰済みになつた脇往還が生じたのではなからうか。

おわりに

小稿では、京都府立本の「播磨国絵図」が松平乗命本、中川忠英本、明石市本よりも「正保播磨国絵図」原本に近い原図をもとに、より正確に模写されたとの見解を再論するとともに、この四つの絵図をもとに慶長期以降整備された一里塚と重視された脇往還を示した。

一里塚を設置された摂津への脇往還は、淡河（有馬）道、淡河道から分岐する相野への道があつた。丹波へは西国巡礼道、加古川の両岸には一里塚を備えた脇往還が並走し、行き止まりだった北条ノ市場（明楽寺）道は、整備され杉原谷道に結ばれるなど、複数のルートがあつた。これに対し但馬へは生野道だけに一里塚が設置された。また

美作道・因幡道も佐用郡までは一本のルートで、佐用郡内で分岐していた。

「慶長播磨国絵図」の一里塚をもとに、八木哲浩氏が掲げた脇往還のうち、青山村 前ノ庄村の脇往還は疑問があり、姫路 前ノ庄村 雪彦山を結ぶ信仰の道だったのではないかと考える。また飾西村 刀出村の脇往還は、その前後の一里塚の標記の見落としがあり、書写山から刀出村を通り安志町・山崎村を結ぶ信仰の道、さらに山崎村から千草町に向かう鉄の道だろう。この他八木氏が全く言及していないが、室津道にも一里塚が構想された。

播磨一国を支配する池田輝政は姫路を起点に信仰と物流を押さえる脇往還を設け、領内を支配する構想を持っていたのではなからうか。「慶長播磨国絵図」はその構想を示した計画図と考える。

ではこのように確立した近世播磨の街道はどのように利用されたのか。これについては、東国から伊勢参宮をした後、西国を回った参宮日記を検討した小野寺淳氏の研究⁽²⁴⁾、西国三十三所巡礼の巡礼道を検討した田中智彦氏の研究⁽²⁵⁾などがある。

筆者も播磨を通過した旅人の日記や紀行文二〇〇点余りを検討した。明石から姫路への山陽道では、本街道を通らず一里塚のない浜通りを通り、尾上の松（加古川市）や高砂、石の宝殿、曾根の松（以上高砂市）へ回るのが一般的なことで、巡礼者だけでなく公用通行者でも同様であること、浜通りへ向かう分岐点は、藤江村や清水村（明石市）、野口村（加古川市）など複数あること、宿場でもない二子村（播磨町）に宿泊をする事例があることなど、一八世紀になると一里塚の整備された山陽道を利用しない旅が一般的になる。この点についても別稿に委ねたい。

本稿をなすに当たっては、藤田裕嗣氏、加納亜由子氏、大槻守氏、小野寺淳氏からご教示や資料提供をいただいた。また写真版の閲覧を許可いただいた明石市、図版の掲載許可をいただいた天理大学附属天理図書館、京都府立京都学・歴史館に感謝申し上げる。なお一里塚の位置について中村和男氏が『歴史と神戸』三三四、三三六〜三四〇、三四二号（二〇一九〜二〇年）に連載している。

- (1) 『慶長播磨国絵図』は天理大学附属天理図書館所蔵。西播地域皮多村文書研究会『慶長播磨国絵図』（中央出版、一九七九年）。八木哲浩『播磨国絵図の成立年代について』（同書所収）。国絵図研究会『国絵図の世界』（柏書房、二〇〇五年）、海野一隆・織田武雄・室賀信夫『日本古地図大成』（講談社、一九七二年）に掲載されている。
- (2) 『山陽道（西国街道） 歴史の道調査報告書第一集』（兵庫県教育委員会、一九九二年）、『美作道 歴史の道調査報告書第四集』（兵庫県教育委員会、一九九四年）。『近畿地方歴史の道 九巻』（海路書院、二〇〇五年）、同一〇巻（二〇〇六年）として復刻されている。
- (3) 姫路市史編集専門委員会『姫路市史 本編第三巻 近世1』（姫路市、一九九一年）。
- (4) 『東照宮御実記 巻八』慶長九年二月四日条。
- (5) 前掲注(2)によれば、大久保、鶴（太子町）、正條が宿駅に指定されたのは、寛永年間とされる。
- (6) 明石市ほか『企画展 明石藩の世界』（明石市立文化博物館、二〇一六年）。
- (7) 藤田裕嗣『播磨国絵図』小野寺淳ほか「シーボルトが日本で収集した地図」『地理』十一月増刊（二〇一六年）など。
- (8) 新宮町史編集専門委員会『播磨新宮町史 文化財編（たつの市、二〇〇五年）』。
- (9) ほかに神戸市立博物館蔵『播磨国地図』は『正保播磨国絵図写し』とあるが、一七×一三三と小ぶりな江戸時代中期の写しで、これも検討から除外する。
- (10) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』（古今書院、一九八四年）。
- (11) 前掲注(10)。
- (12) 加納亜由子『旗本別所氏旧蔵播磨国絵図の成立と伝来 一七世紀官撰国絵図流布の観点から』（『日本歴史』八三二号、二〇一七年）。
- (13) 前掲注(1)『国絵図の世界』。
- (14) 前掲注(7) 藤田論文。
- (15) 工藤茂樹『正保播磨国絵図』前掲注(8) 所収。
- (16) 大國正美『近世絵図の世界』『播磨新宮町史 史料編 古代・中世・近世』（新宮町史編集専門委員会、二〇〇五年）、大國『新発見！ 原本に忠実な正保の播磨国絵図』『志んぐ草子』（新宮町、二〇〇五年）。
- (17) 大槻守氏によれば、仁色新田（姫路市）は市川東岸にあったが、天和三年（一六八三）市川が氾濫して流路が変わり西岸になった。京都府立本では仁色新田がすでに西岸に描かれており、「どう解釈したらよいか」と疑問を投げかけている（香寺町教育委員会町史編集室『口絵解説』『ふるさと香寺 町史編集室年報』第七号、二〇〇六年）。しかし『正保播磨国絵図』の模写本すべてに共通する問題であり、引き続き検討したい。
- (18) 厳密な検討とはいえないが、所蔵する京都学・歴

- 彩館の前身の京都府立総合資料館職員は、前掲注(7)藤田論文によれば、模写年代のあるほかの国絵図との比較から、明治初期に写したのではないかとの印象を持っていたといい、京都学・歴史館の目録では「正保播磨国絵図」とは扱われていない。
- (19) 西国三十三所巡礼道については兵庫県教育委員会『西国三十三所巡礼道 歴史の道調査第一集』(一九九一年)があり、前掲注(2)『近畿地方歴史の道九巻』で復刻されている。
- (20) 前掲注(2)『山陽道(西国街道) 歴史の道調査報告書第二集』所収の八木哲浩「近世の山陽道」。
- (21) 国立公文書館デジタルアーカイブで公開。
- (22) 「行程記」は山口県文書館蔵。大國正美『絵図と歩くひょうご西国街道』(神戸新聞総合出版センター、二〇一八年)に写真を掲載。
- (23) 前掲注(2)『美作道 歴史の道調査報告書第四集』所収の八木哲浩「近世の美作道」。
- (24) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷 関東地方からの場合」『筑波大学人文地理学研究』第一四号、一九九〇年。
- (25) 前掲注(19)所収の田中智彦「西国巡礼案内記と東国からの巡礼者」ほか。